

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 識緯説の起源及び發達(一)   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)  |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1934  |
| Jtitle           | 史学 Vol.13, No.2 (1934. 8) ,p.55(233)- 103(281)  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0055">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0055</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 讖緯説の起源及び發達 (二)

杉 本 忠

## 目 次

- 一 先人の説
- 二 讖緯説の性質内容
- 三 先秦の書檢討
- 四 秦 讖 (以上本號)
- 五 前漢王莽以前の讖緯説
- 六 王莽と讖緯説
- 七 光武と讖緯説
- 八 結 語

## 一 先人の説

讖緯の書は或は「孔子曰」として説を記し、或は孔子の作として之に附會するものが頗る多い爲、支

讖緯説の起源及び發達(一)(杉本)

(三三)

五五

那に於ても早くより學者の間にその孔子の作なりや否が問題となり、是と同時にその起原を論ずる者も頗る多いのである。今それらを次に舉げれば、後漢の荀悅の申鑒俗嫌第三には

世稱<sub>二</sub>緯書仲尼之作<sub>一</sub>也、臣悅叔父故司空爽辨<sub>レ</sub>之、蓋發<sub>二</sub>其僞<sub>一</sub>也、有<sub>レ</sub>起<sub>二</sub>於中興之前<sub>一</sub>、終張之徒之作乎、或曰雜、曰<sub>下</sub>以<sub>レ</sub>已雜<sub>二</sub>仲尼<sub>一</sub>乎、以<sub>二</sub>仲尼<sub>一</sub>雜<sub>レ</sub>已乎、若<sub>二</sub>彼者<sub>一</sub>以<sub>二</sub>仲尼<sub>一</sub>雜<sub>レ</sub>已而已、然則可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>八十一首非<sub>二</sub>仲尼之作<sub>一</sub>矣、或曰燔<sub>レ</sub>諸、曰<sub>二</sub>仲尼之作<sub>一</sub>則否、有<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>焉則可

とあり、緯書を以て後漢中興前即ち前漢末に起るとし、仲尼の作ではないが、仲尼の説を採つたものとしてゐる。

下つて梁の劉勰の文心雕龍正緯第四には

按<sub>レ</sub>經驗<sub>レ</sub>緯、其僞有<sub>レ</sub>四、蓋緯之成<sub>レ</sub>經其猶<sub>下</sub>織<sub>二</sub>綜絲麻<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>雜布帛乃成<sub>上</sub>、今經正緯奇、倍擿千里、其僞一矣、經顯<sub>二</sub>聖訓<sub>一</sub>也、緯隱<sub>二</sub>神教<sub>一</sub>也、聖訓宜<sub>レ</sub>廣、神教宜<sub>レ</sub>約、而今緯多<sub>二</sub>於經<sub>一</sub>、神理更繁、其僞二也、有<sub>レ</sub>命自<sub>レ</sub>天、廼稱<sub>二</sub>符讖<sub>一</sub>、而八十一篇皆託<sub>二</sub>於孔子<sub>一</sub>、則是堯造<sub>二</sub>錄圖<sub>一</sub>、昌制<sub>二</sub>丹書<sub>一</sub>、其僞三矣、商周以前圖錄頗見、春秋之末羣經方備、先<sub>レ</sub>緯後<sub>レ</sub>經、體乖<sub>二</sub>織綜<sub>一</sub>其僞四矣、…中略…故知前世符命歷代寶傳、仲尼所<sub>レ</sub>撰序錄而已、於<sub>レ</sub>是伎數之士附以<sub>二</sub>詭術<sub>一</sub>、或說<sub>二</sub>陰陽<sub>一</sub>、或序<sub>二</sub>災異<sub>一</sub>、若<sub>二</sub>鳥鳴似<sub>レ</sub>語、蟲葉成<sub>レ</sub>字、篇修滋蔓必假<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>、通儒討覈謂<sub>レ</sub>起<sub>二</sub>哀平<sub>一</sub>

とあり、その説は經緯の文字に囚はれたもので妥當とは認め難いが、要するに前漢末哀平の際に起ると

してゐるのである。

宋の王應麟の困學紀聞集證卷八下には

按ニ李尋、有五經六緯之言、蓋起ニ於哀平一

とあり、漢書李尋傳に六緯の語があるを引いて、哀平に起るとし、又明の胡應麟の筆叢四部正譌にも

讖緯之說蓋起ニ於河圖洛書、當ニ西漢末、符命盛行、俗儒增益、舛訛日繁

蓋哀平末端已兆

等とあり、清の顧炎武の日知錄卷之三十には

史記趙世家、扁鵲言、秦穆公寤、而述ニ上帝之言、公孫支書而藏之、秦讖於レ是出矣、秦本紀、燕人

盧生使入レ海還、以ニ鬼神事、因奏ニ錄圖書二曰、亡レ秦者胡也、然則讖記之興、實始ニ於秦人、而盛ニ於

西京之末一

とあり、讖の起原を秦人にありとし、西漢末はその盛行せる時代とし、趙翼の廿二史劄記には

讖緯起ニ于西漢之末、張衡著レ論曰、漢以來並無ニ讖書、劉向父子領ニ校秘書、尙無ニ讖錄、則知レ起ニ于

哀平之際一也

とあるのである。

併して又朱彝尊の經義考卷二百九十八通說四說緯の條には桓譚・張衡・尹敏・班固・蘇竟・王充・韓勅・荀

悅・孟達・劉熙・摯虞・范曄・蕭綺・劉勰・劉昭・隋書經籍志・章懷太子・孔穎達・楊侃・徐鍇・余靖・歐陽修・鄭樵・胡寅・晁公武・洪邁・呂祖謙・葉適・陳然・陳振孫・真德秀・魏了翁・劉炎・王應麟・黃震・陳普・王禕・張九韶・胡應麟・朱載堉・徐常吉・顧起元・潭浚・項德棻・黃秉石・孫穀・顧炎武・胡謂等四十八家の緯に關する説を擧げてゐるのである。今先に記せる者と重複する者を除き、その主なる説を擧ぐるに、桓譚・張衡・尹敏・歐陽修・鄭樵・晁公武・洪邁・陳然・陳振孫・真德秀・劉炎等は讖緯の偽妄を攻撃してゐるのであり、張衡・孔穎達・鄭樵・晁公武・陳振孫・真德秀・王禕等は何れも哀平に起るとし、王禕は

其書出於漢哀平之世、蓋夏賀良之徒爲之としてゐるのであり、胡寅は

緯書原於易之推往以知來

とし、呂祖謙は「術數の士に出づ」とし、張九韶は

讖緯之説、秦以前未之聞也、始皇時方士盧生入海、還奏錄圖書、此圖讖之所始乎

とし、朱載堉は

俗謂緯書出於哀平之世、王莽好讖、乃有妄人撰作諸緯、茲説不然、蓋緯書之文未必出於妄人之手、其間繆妄亦雖不無、要在學者擇焉而已、一切皆以爲妄、而棄之、則過矣、太史公大小載皆在哀平之前、已有通卦驗之書、而引下差之毫釐、繆以千里之言、豈待王莽而後有哉、大

抵緯書起<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>前漢<sub>一</sub>、去<sub>レ</sub>古未<sub>レ</sub>遠、彼時學者多見<sub>二</sub>古書<sub>一</sub>、凡著述必有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>本、不<sub>レ</sub>可<sub>下</sub>以<sub>二</sub>其不經<sub>一</sub>而忽<sub>レ</sub>之也

とあり、太史公の自敘に易緯通卦驗の句を引いてゐることを挙げ、王莽以前已に緯書ありとし、且緯書は古を去る未だ遠からざる前漢に、學者の手により、しかも古書に本いて著述せられたとしてゐるのである。顧起元は又

其書實不<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>於孔子<sub>一</sub>、蓋漢武購<sub>二</sub>求遺書<sub>一</sub>、當時儒者多僞作以應<sub>レ</sub>命、孔安國・毛公輩皆目以爲<sub>二</sub>妖妄<sub>一</sub>、哀平之世、夏賀良之徒又增爲<sub>レ</sub>之

と説き、武帝の遺書を求めた際に儒者が之に應じて僞作せるものとし、胡謂は

圖讖之術自<sub>二</sub>戰國時<sub>一</sub>已有<sub>レ</sub>之

としてゐるのである。

而して最後に朱彝尊は是等の説を記して後

按緯讖之書相<sub>二</sub>傳始<sub>二</sub>於西漢哀平之際<sub>一</sub>、而小黃門譙敏碑、稱<sub>下</sub>其先國師譙贛深明<sub>レ</sub>典、奧<sub>二</sub>讖錄圖緯<sub>一</sub>、能精<sub>二</sub>微天意<sub>一</sub>、傳<sub>レ</sub>道與<sub>中</sub>京君明<sub>上</sub>、則是緯讖遠本<sub>二</sub>於譙氏京氏<sub>一</sub>也、徵<sub>二</sub>之於史<sub>一</sub>、如<sub>下</sub>亡<sub>レ</sub>秦者胡、明年祖龍死、楚雖<sub>二</sub>三戶<sub>一</sub>亡<sub>レ</sub>秦必楚<sub>上</sub>、已爲<sub>二</sub>緯讖<sub>一</sub>兆<sub>二</sub>其端<sub>一</sub>矣、迨<sub>二</sub>新莽之篡<sub>一</sub>、丹書・白石・金匱・銅符海内四出、於<sub>レ</sub>是、劉京・謝囂・臧洪・哀章・甄尋・西門君專等爭言<sub>二</sub>符命<sub>一</sub>遂遣<sub>二</sub>五威將軍王奇等<sub>一</sub>、乘<sub>二</sub>乾文車<sub>一</sub>、駕<sub>二</sub>坤

六馬、將軍持節、稱太一之使、帥持幢、稱五帝之使、頒符命四十二篇於天下、不過藉以愚一時之耳目爾 以下略

とあつて、碑文を引いて既に昭帝の頃譙贛・京房等が讖録圖緯に通じてゐたとし、又史記の始皇本紀を引いて、既に緯讖の兆ありとし、王莽に至つて符命の盛行せるを記してゐるのである。

之を要するに讖緯は前漢末哀帝平帝の頃に至り初めて起つたとする説と、前漢の武帝・昭帝の頃既に之ありとする説と、圖讖の端は秦の始皇、中には穆公にまで遡り得るとする者があるのであるが、清の俞正燮に至つては緯を以て更に古きものとし、之を古の史書としてゐるのである。即ち癸巳類稿卷十四緯書論には

緯者古史書也——中略——古太史書雜處、取易於河圖、則河圖餘九篇、取洪範於洛書、洛書餘六篇、漢人依經錄出者、易有飛候、書有五行、詩有五際、皆史氏之舊、孔子定六經、其餘文在太史者後人目之爲緯、——中略——然則孔子不定緯何也、緯記黃帝以來靈臺諸史不必皆賢——中略——禴祥不法、是以孔子論六經、紀異而說不書、然則孔子不覽緯乎——中略——孔子畢覽緯、始論六經、覽緯不作緯也、然則藝文志著錄不載緯者何也、如漢律漢令在廷尉、則亦不載也、緯在太史不在秘書、——中略——藝文有太一以下及海中占、而無甘石星經、甘石書史記天宮書漢書天文志皆引之、唐開元時猶存、又漢志天文二十家有圖書秘記十七篇、蓋采緯文、其他緯及甘石不入志

者、以下在<sub>二</sub>史官<sub>一</sub>之故<sub>上</sub>、且文字時々増續不定、非<sub>三</sub>秘閣所<sub>二</sub>讎校<sub>一</sub>、後漢緯始入<sub>二</sub>秘府<sub>一</sub>、——中略——隋經籍志有<sub>二</sub>緯八十一種<sub>一</sub>、唐六典秘書郎甲部九日圖緯以紀<sub>二</sub>六經讖侯<sub>一</sub>注云、河圖等十三部九十二卷、知<sub>三</sub>東漢至<sub>レ</sub>唐皆在<sub>二</sub>秘書中<sub>一</sub>、更魏隋焚<sub>レ</sub>緯、但焚<sub>二</sub>民間傳本<sub>一</sub>、廷臣議<sub>レ</sub>禮、師儒說<sub>レ</sub>經、猶檢<sub>レ</sub>緯、則漢志不<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>緯無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>疑也、緯所<sub>レ</sub>記止<sub>二</sub>哀平<sub>一</sub>者、以下其漸行<sub>二</sub>民間<sub>一</sub>、篇第已定<sub>上</sub>、又自<sub>二</sub>史遷<sub>一</sub>後有<sub>二</sub>紀表志傳<sub>一</sub>、故緯不<sub>レ</sub>復增<sub>レ</sub>也、有<sub>二</sub>魏晉受命<sub>一</sub>者史官先賢所<sub>レ</sub>推也、有<sub>二</sub>近俗別字<sub>一</sub>者、史官不<sub>レ</sub>必皆明<sub>二</sub>小學<sub>一</sub>、又史主<sub>二</sub>記載<sub>一</sub>雅言野說俱存<sub>レ</sub>之、異<sub>二</sub>於著作<sub>一</sub>考<sub>レ</sub>論是非<sub>一</sub>也、謂<sub>二</sub>緯出<sub>二</sub>於哀平<sub>一</sub>者、哀平時始流布、謂<sub>二</sub>其時所<sub>レ</sub>造<sub>一</sub>、則其書苛碎浚雜、或乃瑰偉廓寥不同<sub>二</sub>乖異<sub>一</sub>、所謂國殊<sub>二</sub>家占<sub>一</sub>非<sub>レ</sub>僞託者所<sub>二</sub>能及<sub>一</sub>也、然則緯宜<sub>レ</sub>傳乎、——中略——然則讖亦宜<sub>レ</sub>傳乎、緯故在<sub>レ</sub>讖、讖舊名也——下略

とあり、緯を以て古來の史官の手になり、その手許に保存せられた記録とし、其等の記録中孔子の採録せるものは經となり、その餘は緯となつたとし、従つて孔子は緯を作つたのではないが、その經を編するに當つては悉く緯を覽たのであるとし、且つ古來の難點たる漢書藝文志にその目を記載せられてゐない點、哀平に起ると云はれる理由、その文字の雅古ならざる點等にもそれ〴〵一應の説明を與へてゐるのであり、後述の如く、固よりその採るに足らざる點も多々あるのであるが、しかも緯を以て妄なりとする一連の支那學者の説に對立して、別に一家言を爲してゐることは認められるのである。

轉じて我國に於ては如何と云ふに、諸家の讖緯にかんする説は、多く他の問題に關する論文の一部、



或ひは東洋史概説の書中に簡單に記せられてゐるに過ぎないのである。今それ等を發表せられた順序に舉げれば、飯島忠夫博士<sup>(一)</sup>は

識緯の學は前漢の末葉に於て始めて起る。識は神秘なる原因によりて現れたる文字或は語句等を指し、緯は孔子の著作といへる古文字の書を指し、經書を輔翼するの義あり。緯書の孔子の著に非ずして前漢末の學者の假託に出でたるや論なし。識緯の學とは即ち識或は緯によりて未來を察するの學なり。

とし、高桑駒吉氏は<sup>(二)</sup>

識緯學は蓋し五行説から出でたるものであつて前後の哀帝平帝の際に起つて居る。

とし、福島俊翁氏は<sup>(三)</sup>

緯書は西漢の末頃から民間に表はれ哀平の時代に盛行した所の怪誕取に足らぬ者として目せられたが、それは識と緯が雜然として區別せられなくなつたからで、本來の緯書といふものは豫言的なものではなかつたらうと思はれる。清の俞正燮の言つた様に古の史書であり傳説的な記録として太史に在つたものかも知れぬ。又清の金鶚の言つた様に古聖の遺言であつたが周末秦漢以來雜駁な陰陽五行災異の思想が混入して全く不經のものとなつたのかも知れない。

とし、松井等氏は<sup>(四)</sup>

五行説に由つて人事の吉凶を判断する理論を一層神秘化したものが讖緯説である。讖緯説を記載した主要なる書物は、總稱して緯書と謂はれ、其の他にも多數の雜書があつた。——中略——讖緯の思想の起源は、餘程古るものであるが、其れが五行説の發達に促がされて盛に流行して來たのは前漢の季世からのことである。是れは、一つには當時の社會が不安の空氣に包まれて、おのづから神秘的思想に付て興味を感じるやうになつたからであり、又一つには讖緯説それ自身が一つの思想として組織的に整頓されて來たからである。

とし、加藤繁博士<sup>(五)</sup>は

騶衍は孟子よりや、後の人であるが、その終始五徳の説は、從來存した五行説と、自然現象の中に天の意思を求めようとする考方とに本づき、王朝の交迭を神秘的に見ようとしたもので、孟子を合理主義的であるとすれば、此れは神秘主義と云つても差支無いであらう。而して戰國末期より秦漢にかけて行はれた圖讖も、亦均しく此の神秘主義の流を汲むものといふことができる。

とし、橋本増吉教授<sup>(六)</sup>は

漢代に入りては、この種の陰陽五行説、或は九星説といふやうな神秘的思想が、上下共に一般の人心を支配せしことは益々著るしき有様となつた。所謂讖緯の説もかくの如き風潮の一面を現はすもので、讖とは天の意思が圖符によりて豫め表はさるゝことを意味するものである。例へば廬生が曾

て海に入りて還り、「秦を亡ぼすものは胡なり」との讖言を奏したとか、後漢の光武帝に奉つた赤符に「劉秀天子とならん」といふ讖文があつたとかいふ類で、之れを天の符命とも稱するのである。また緯書は既に經書に對する緯書で、孔子が六經を編纂せし時、後人の大義に暗きを恐れ、緯書を述べて之を明かにしたものだ<sup>と</sup>稱するのであるけれども、漢代以後の著作物なることは勿論で、その思想は明かに漢代思想の特色である神秘的豫言を以て經義に比附したものである。その經義を説くに神秘的豫言を以てする點に於て、圖讖符命に信賴する思想と相合致するところがあるので、これを總括して讖緯の學と稱するのである。

とせられてゐるのである。それから讖緯を主題とした論文としては、高於菟三氏<sup>(七)</sup>の篇目の研究の他は、嘗て小柳司氣太博士が明治四十三年に哲學雜誌第二十五卷第二百八十四號に「讖緯の學を論ず」として發表せられたものがあるに過ぎないのである。今その起源に關する説を見るに

之を要するに天人感應の信仰に、合理的・非合理的の二種あり。第一は孔子老子の如く哲學的に道徳的に之を説明したる者にして、第二は陰陽五行其他方伎・術數・卜筮・豫言・巫祝の流の如く算數的に善惡の加減を打算し靚面に因果應報を主張したる者なり。此二流は相伴ふて春秋戰國より以て漢代に至り相合一して以て所謂讖緯説を創するに至る。而して其原因に二あり。一は即ち方伎術數に關する讖説が其の神聖を維持するが爲に特に緯といふ名稱を創めて以て之を經書に對せしめ、以て

讖緯合稱の端緒を開き、一は漢代經學の昌運と與に儒流が一層其解釋を神秘的に裝はしめんが爲に  
此等の術數方伎を利用したる者なるべし。

とあり、主としてその起源を讖緯の性質の上から論じられてゐて、年代的には特に論じられてゐないの  
であるが、その論文中諸々に散見する説を綜合すれば、前述の支那諸學者の説と變りがないやうに思は  
れるのである。

之を要するに、日支の先賢の讖緯を論ずる者實に數十家あつて、却て衆説粉々として人をしてその歸  
趨に迷しむるの感があるのであり、今その由て來る所を見るに、或はその資料涉獵の廣狹により、或は  
讖緯の性質内容其物にかんする見解の相違により、その説を異にするに至り、又その結論に於て當れる  
に近きも、未だその精ならざるを憾むべきもの等あり、爲に筆者も亦再此の問題を新に論せんとする  
に至つたのであるが、是等諸家に鑑み勉めて涉獵に遺漏なからんことを期し、先づ讖緯の性質を究めて  
之を論せんとするのであるが、その淺才を顧みず敢て此の舉に出でたるは、後人の附託と否とに係らず  
讖緯說研究の實に漢代思想並びに經學の證明に必要缺くべからざるものがあり、併せて戰國以來の古傳  
古説を窺知るの便を有するものあるが爲に他ならないのである。

## 二 讖緯說の性質内容

前述の如く讖緯説の起源や發達を論ずるには、先づ讖緯説の性質内容を明らかならしめる必要がある。筆者は嘗て慶應義塾大學東洋史學科に在學中現存緯書の内容を分類した事があるが、それらを此處に詳記することは餘りに多くの紙數を要する恐があるし、又それらの中陰陽説と五行説とに關するものは本誌前々號に「讖緯説と陰陽五行説」なる題目の下に論じておいたのであるから、此處には分類の項目とその簡単な説明を記するに止め、後に他の諸書に表はれた讖緯的思想を論ずる際、それに該當する諸例を擧げる事にしたいと思ふ。

讖緯説中最も古く遡り得る思想は恐く瑞祥(八)に關するものであらう。瑞祥とはいふまでもなく天子の聖徳に應じて現れる佳き意味の異變異物であるが、讖緯説中に於ては次の如く多種多様になつてゐるのである。

天に關するもの

日抱載(九) 景星 德星 景雲 祥風 甘露

地に關するもの

醴泉

植物

朱草 蓂莢 嘉禾 華芾 元芝 菴蒲 連理 木根車

動物

麟 鳳 龜 龍 白虎 神馬 九尾狐 白狐 白鹿 白雉 白雀 白鳥 三足鳥 比目魚 大貝  
その他

明珠 黒丹

人に關するもの

四夷貢物 西王母來獻

是等の中、龍と龜とに關するものは特別の瑞祥即ち河圖洛書となり所謂符命の一種となつてゐるのである。即ち伏羲・黃帝・堯・舜・禹・湯・文・武・周公・秦王政・漢高祖等が其々圖書の符命を受けた事、それらの符命が五行説によつて作られたのを示してゐる事、その五行説が相勝と相生の二説を含んでゐる事等は嘗て述べたとほりである。

それから前述の符命が王者の將に起らんとする前兆であると云ふ考から讖（しん）即ち豫言が重要な要素の一になつてくるのであつて、讖緯と云ふ語よりも古い圖讖と云ふ語は前記の圖書と此の讖とを合稱したものであらう。現存の讖緯書中に於ては他の要素と比較するに寧ろその量の少いものゝ方であるが、それは六朝以來の禁燔に際し、最も此の部分が脱まれた故とも思はれるのであり、後述の王莽光武の頗る尊信したのも此の讖であつたのである。現存のものは多く漢高祖に就いての豫言の如き形をなしてゐるの

であるが、さればとて必しも漢以前のものとは思はれず、蓋し漢代以後の附會によるものが多いのであらう。その代表的なものは既に述べた所<sup>(十二)</sup>であるが、他に項羽<sup>(十三)</sup>や張良にかんするもの、又漢の前途を豫言<sup>(十四)</sup>した語もあるのである。

それから瑞祥と對蹠的なものに咎徴と災異との思想がある。咎徴とは君行の是非により、陰陽或は調和し、或は調和せず、それに従つて風雨・水旱・寒暖等が或は適當に或は偏して至ると云ふ庶徴の思想の中後者乃ち悪い方の場合である。之に關する諸例も亦既に舉げた所<sup>(十五)</sup>であるが、その他大旱に際しての請雨の祭即ち雩に關する記載等を有してゐる。

災異も亦咎徴に類するものであるが、咎徴が當然あるべきものの極端に無い場合、或しくは極端に有り過ぎる場合の災であるのに對し、災異はやはり君行惡しきによつて起る陰陽不調和に原因する災ではあるが、一方怪異なる異變と云ふ意味を含むものであつて、その點善い意味の異變である瑞祥に眞に對應すべきものであらう。春秋緯潛潭巴にも

災之爲言傷也、隨事而誅、異之爲言怪也、先發感動之二也

とあり、惡行を罰すると共に、その異を怪しみ感動せしめて、惡行を改めしむる意を含むものと解してゐるやうである。而して災異の中には日蝕・日變・彗孛等の天文の他、土の雨、石の雨、刀の雨であるとか、河水逆流であるとか、地震・地鳴であるとか、蝗蟲等が記せられてゐるのである。

禮に就いては太一に本く禮の本質や、王者が禮を行ひ中道を得れば陰陽萬物四時が調和し、天の日月五星の行が亂れず、北斗の光明が明かであることを記して居り、個々の問題に就いては、社稷・祖廟・五府・明堂・靈臺・時令・封禪・郊祀・禘祭・禘祭・射禮・官制・五爵・九錫・旗長・旗數・旗名・墳墓・口實その他に關するものがあり、その多くは陰陽說或は五行說によつて説かれて居り、それらの例も亦嘗て記して置いた所である。

樂に就いては五聲を記したものの、五音を五星に當てたもの、五音二少を北斗に配したものの、五音に齊・陳・曹・秦・唐・魏・邾・鄒・衛・王・鄭等の諸國を配したものの、太平の樂、亡國之樂、諸帝の樂、四夷の樂等を記してゐる。

讖緯書中最もその量多きは天文星占に關する記事であらう。先づ太陽に關する日占には、日蝕の晦・朔・二日による占、皆既による占、日蝕時の太陽の廿八宿の位置による占、日蝕の起つた日の干支による占、日色による占、日暈<sup>(十七)</sup>・日冠・日載・日珥・日抱・日背・日璣・日彗・日刺等日の旁氣による占、日死<sup>(十八)</sup>・日病・日分・日夜出・兩日並出・三日並出・日與月並照等種々の占があるのである。

月占には月蝕による占、月暈・月珥の占、月の廿八宿或は他の諸星を犯す占、月行遲速の占等がある。五星占には、歲星に、その色光芒による占、居る所の分野による占、廿八宿に宿る場合の物價高低の占、廿八宿以外の星座に入る場合の占があり、熒惑・填星・太白に廿八宿に入るの占及び廿八宿以外の星



座に入る占があり、辰星に、その色による占、廿八宿及び他の星座に入るの占等があり、その他五星悉く一方或は一宿に聚る占と、五星の中二が相接近する占とがある。

それから太一及び北斗に關する諸説があり、廿八宿にかんする記事があり、廿八宿以外の諸星には、春秋緯文耀鉤に文昌宮・天庫・老人星があり、春秋緯合誠圖に天理・太微・少微・軒轅・羽林・北落・土司空・天廩・内階・天雞・天樓・咸池・王良・大陵・長垣・攝提を記し、樂緯叶圖徵に鉤陳・閣道・元戈・弁星等があり、詩緯汜歷樞に梗河・織女・天市・娘星・司命があり、論語陰嬉讖に平星・附耳・棟星・貫索・天紀・附路・杵臼・天斛・土公等を記してゐる。

その他諸書に國皇・蚩尤旗・獄漢・五殘・旬始・天狗・柱矢等諸種の彗孛に關する占、流星・客星・虹蜺に關する占等がある。

又占星術に於て、天象による占と、地上に起る事件の位置とを結び附けるに缺くべからざる分野の考は勿論讖緯書中にも之を記してゐるのであり、春秋緯感精符に

地爲山川、山川之精上爲星辰、各應其州域、分野爲國、作精符驗

とあるばかりでなく、三種の分野の説を有してゐる。則ち春秋緯文耀鉤には北斗七星を九州に宛てる分野の説があり、春秋緯元命苞と詩緯推度災に各一種の分野の説があるが、是等は何れも廿八宿のみならず、それ以外の星座をも交へてゐるのであり、史記の天官書、漢書天文志等に見える分野とは大いに異

つてゐるのである。

その他史漢の書志に記載なき天數その他も記せられて居り、天地間の距離を十七萬八千五百里（尙書緯考靈曜及洛書緯甄曜度）或は一億五萬里（詩緯含神霧）とし、周天の數に就いて或は一百七萬一千里（春秋緯考異郵及洛書緯甄曜度）とし或は二十三萬里（春秋緯元命苞）としてゐる。それから又周天を三百六十五度四分度之一とし一度を二千九百三十二里千四百六十一分里之三百四十八（尙書緯考靈曜）或は二千九百三十二里七十一歩二尺七寸四分四百八十分分之三百六十二（春秋緯考異郵・洛書緯甄曜度）とし、その他七衡六間の説を記し、地の四遊を記し、日行を一度、月行を日に十三度十九分度之七とし、日景を記し千里に一寸の差ありとし、その他九天の説を記し、又天文觀測の正確の必要が説かれてゐる。

それから天文と密接な關係を有する曆數も又説かれてをり、甲子甲寅の曆元や、開闢以來の年數などが記されてゐるが、此の他最も重要なのは、陰陽説や易理によつて、曆運を説き是によつて受命易姓を推す説であつて是は既に發表したとほりである。<sup>(十九)</sup>

その他の要素としては感生帝説<sup>(二十)</sup>があり、又伏羲・神農・黃帝・少昊・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜・禹・后稷・湯王・文王・武王・孔子・顏延・曹子・子貢・始皇・劉季・蕭何等の奇異なる爲人即ち相貌體容を記して居り、禮緯含文嘉は虚戲・燧人・神農を、春秋緯運斗樞は伏羲・女媧・神農を、春秋緯命歷序及び保乾圖は共に天皇・地皇・人皇を以て三皇として之を説き、尙書緯刑德攷は刑を記し、春秋緯説題辭は易・尙書・詩・禮・孝經等

に對し、讖緯説の立場より定義を下し、河圖括地象・始開圖・絳象・玉版等の書は崑崙・黃河・大九州・小九州等の地理を記し、河圖玉版には穿胸民・龍伯國人等の異形の民を記し、孝經緯援神契は五嶽四瀆の神を記し太山の人の生命の長短を知るを記し、<sup>(廿一)</sup>龍魚河圖は五岳君神・五嶽將軍・四海君及夫人・河伯及夫人・髮・耳・目・鼻・齒・劍・矛・弓・斧・盾等の諸神名を記してゐる。

併して以上述べ來つた諸要素は至る所に陰陽説と五行説とを含んで居り、それらが讖緯説の二大根幹を爲してゐることは嘗て述べたとほりであり、更に此の兩者を、從つて讖緯説全般を貫くに所謂天人感應の思想の存することは既に小柳博士以下の論せられた通りである。

之を要するに讖緯説は現存緯書類によつて知り得る所によれば、天人感應の思想により、王者の行美しく徳盛んなる時は天が之に瑞祥を下すとし、新に王者たらんとする者の徳は勿論旺盛であるから、その際にはその受けて立つ所の五行の徳に應じ、瑞祥の中特に重大な河圖洛書等の符命を天より與へられるのであり、この場合多くその王者たる以前に天命を受ける爲、こゝに讖言即ち豫言と云ふ要素を生じ、所謂圖讖なる語を生ずるのであるが、又王者の政悪しく徳衰へたる時は、天が之に咎徴や災異を現すのであり、漢代の儒教と同じく禮樂も亦此の意味即ち陰陽五行瑞祥災異の思想から説かれて居り、天文星占も亦天人感應と五行思想或は豫言驗應の意味から説かれて居り、天文と密接な關係を有する曆數は、易の數と、數を説く陰陽説により曆運なる思想を生じ、その消息の際に天命の革ることを説いて居り、

その他五行思想による感生帝説であるとか、天文や五行思想等と共に傳へられ受入れられたかと思はれる鄒衍以來の地理説や、方士道家等の諸神名等が記せられてゐるのである。而して是等の瑞祥・符命・讖言・咎徴と災異・禮樂・天文星占・曆數と曆運・感生帝説・地理その他の諸要素諸思想中何れが最も主要であるか、その中幾何を有すれば、讖緯説を有すと爲し得るやと云ふ見解の相違により、その起源の時期をも異にするわけであるが、若し史上にその影響を與へし點から云へば、五行説により王朝の興廢交迭を説き之を豫言する符命・讖言と、易及び陰陽説により易姓革命を説く曆運とが、最も重要な要素と云へることは、嘗て論じたとほりである。

### 三 先秦の書檢討

讖緯説中の諸要素諸思想ほどの程度まで古書に現れてゐるであらうか。現存の諸緯書に蒐録せられた時代即ち緯書の製作年代は別であるが、思想としての讖緯説は、古書を檢し之と比較することによつて、その何れの時代にまで遡り得るかを知り得るわけである。

先づ詩經であるが、國風周南麟之趾に

麟之趾、振振公子、于嗟麟兮

麟之定、振振公姓、于嗟麟兮

## 麟之角、振振公族、于嗟麟兮

とあり、瑞祥の一である麟にかんする詩を有し、春秋に「獲麟」を記する事と共に「麟」の傳への頗る古い事を思はせるのであり、大雅文王之什靈臺には

## 經ニ始靈臺、經之營之

とあり、「靈臺」の名稱の古きを示し、商頌玄鳥には

## 天命ニ玄鳥、降而生、商、宅ニ殷土芒芒

とあり、「玄鳥の感生説」をも有するのである。以上の麟、靈臺、玄鳥による感生説等は何れも讖緯説中に入入れられてはゐるのであるが、それは、讖緯説がその一部として、これら春秋時代以來の古傳を採用したものであり、これらの詩經に見えることからして、讖緯説を詩經の時代にまで遡しむることの不可なるは云ふまでもない事であらう。

書經は詩經に比して、その製作年代に關し甚しく議論の餘地を有するものであり、必しも先秦の書と斷じ難いのであるが、今暫く之を置き、その内容中より讖緯説的要素を索出するに、虞書益稷には

## 簫韶九成、鳳皇來儀

とあり、鳳皇を記し、商書咸有一德には

## 惟吉凶不僭在人、惟天降災祥一在德

とあり、又同篇に

毫有<sup>レ</sup>祥、桑穀共生<sup>ニ</sup>于朝<sup>一</sup>

とあり、史記の殷本紀によれば

帝太戊立、伊陟爲<sup>レ</sup>相、毫有<sup>レ</sup>祥、桑穀共生<sup>ニ</sup>于朝<sup>一</sup>、一暮大拱、帝太戊懼問<sup>ニ</sup>伊陟<sup>一</sup>、伊陟曰、臣聞妖不<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>德、帝之政其有<sup>レ</sup>闕與、帝其修<sup>レ</sup>德、太戊從<sup>レ</sup>之、而祥桑枯死而去

とあり、頗る讖緯説の災異の思想に類似してゐるのであり、周書顧命には成王の崩じた後、康王代りて立つ時の禮の中に

越玉五重陳<sup>レ</sup>寶、赤刀・大訓・弘璧・琬琰在<sup>ニ</sup>西序<sup>一</sup>、大玉・夷玉・天球・河圖在<sup>ニ</sup>東序<sup>一</sup>

とあつて、河圖を天子の寶の一として記してゐるのである。これはかの論語子罕に

子曰、鳳鳥不<sup>レ</sup>至、河不<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>圖、吾已矣夫

等とある語と共に、河圖洛書の説の起源をなすものであらう。それから洪範であるが、その皇極説が易の太極説と共通の考らしく思はれる點、第六の二德に剛・克・柔・克の語ある點、第七の稽疑に筮を説く點等からしても、その易の思想乃至陰陽説を含むことは明かであるが、又五行を説くものとされるに拘らず十疇でなく九疇である點は、易に於いて數が九に極ると云ふ思想によるものと思はれ、又九疇全體の細目即ち五行(五)五事(五)八政(八)五紀(五)皇極(一)三德(三)稽疑(七)庶徵(十)五福(五)六極(六)の合計

數五十五は易の天地の數即ち一・三・五・七・九と二・四・六・八・十の合計に等しいのであり、此の事實は既に朱子が易學啓蒙(朱子大全七十六載之)の中に

河圖之一六爲水、二七爲火、三八爲木、四九爲金、五十爲土、則固洪範五行、而五○有○五○者○又○九○疇○之○子○目○也○、是則洛書固可ニ以爲易、而河圖亦可ニ以爲範矣

と説いて指摘してゐることであるが、是等の數が讖緯説の中に於て重視せられた事は既に詳説したとおりであり、又第八疇の庶徵は

曰雨、曰暘、曰燠、曰寒、曰風、曰時、五者來備、各以ニ其敍、庶草蕃廡、一極備凶、一極無凶、曰休徵、曰肅時雨若、曰乂時暘若、曰哲時燠若、曰謀時寒若、曰聖時風若、曰咎徵、曰狂恒雨若、曰僭恆暘若、曰豫恒燠若、曰急恒寒若、曰蒙恒風若

とあつて讖緯説に頗る類似してゐるのであり、又その後の

庶民惟星、星○有○好○風、星○有○好○雨、日月之行則有冬有夏、月○之○從○星○則○以○風○雨

とあるは春秋緯考異郵に

月失ニ其行、離ニ于箕ニ者風、離ニ于畢ニ者雨

とあるのに等しい古傳であらう。

以上の如く尙書、殊に洪範に於ては、其内容中頗る讖緯説の一部に類するものあるを知るのであるが、

しかもその革命を説くに當つては、符命を説かず、讖言を記せず、自づから讖緯説と異つてゐるのであるから、讖緯説が尙書所傳の如き古傳を採用せる者と見るべきであらう。

吾々は次に左傳を見やう。周知の如く左傳には卜筮・占夢・星占その他の豫言を記した箇所が頗る多い。今卜筮等の比較的讖緯説と關係の薄いものを除き、之を擧げるに、隱公元年の條に

仲子生而有文在其手、曰爲魯夫人、故仲子歸于我

とあり、手文の豫言を記して讖緯説類似の思想を示して居り、僖公十年の條には死せる太子申生の靈が巫者をして

帝許我罰有罪矣、敝於韓

と曰はしめたとして居り、成公十年の條には

晉侯夢大厲被髮及地、搏膺而踊曰、殺余孫不義、余得請於帝矣、壞大門及寢門而入、公懼入于室、又壞戶、公覺、召桑田巫、巫言如夢、公曰、何如、曰、不食新矣、

とあり、何れも鬼神が天帝に請つて罰せんとしてゐる點及豫言の點において讖緯説に近きものがあるやうである。それから星占には文公十四年の條に

有星孛入于北斗周內史叔服曰不出七年、宋齋晉之君、皆將死亂

とあり、襄公廿八年の條には



二十八年、春、無<sub>レ</sub>冰、梓慎曰、今茲宋鄭其饑乎、歲左<sub>ニ</sub>星紀、而淫<sub>ニ</sub>玄枵、以有<sub>ニ</sub>時菑、陰不堪<sub>レ</sub>陽、蛇乘<sub>レ</sub>龍、龍宋鄭之星也、宋鄭必饑、玄枵虛<sub>レ</sub>中也、枵耗名也、不<sub>レ</sub>饑何爲  
とあり、昭公九年の條には

夏四月、陳災、鄭裨竈曰、五年陳將<sub>ニ</sub>復封、封五十二年而遂亡、子差問<sub>ニ</sub>其故、對曰、陳水屬也、火水妃也、而楚所<sub>レ</sub>相也、今火出而火<sub>レ</sub>陳、逐<sub>レ</sub>楚而建<sub>レ</sub>陳也、妃以<sub>レ</sub>五成、故曰<sub>ニ</sub>五年、歲五及<sub>ニ</sub>鶉火<sub>ニ</sub>而後陳卒亡、楚克有<sub>レ</sub>之、天之道也、故曰<sub>ニ</sub>五十二年<sub>一</sub>

とあり、同じく十年の條には

春、王正月、有<sub>ニ</sub>星出<sub>ニ</sub>于婺女、鄭裨竈言<sub>ニ</sub>從子差曰、七月戊子、晉君將<sub>レ</sub>死

とあり、同十一年の條には

景王問<sub>ニ</sub>於萇弘曰今茲諸侯、何實吉、何實凶、對曰、蔡凶、此蔡侯般弑<sub>ニ</sub>其君<sub>ニ</sub>之歲也、歲在<sub>ニ</sub>豕韋、弗<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>此矣、楚將<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之、然雍也、歲及<sub>ニ</sub>大梁<sub>ニ</sub>蔡復楚凶、天之道也

とあり、同十七年の條には

冬、有<sub>ニ</sub>星孛<sub>ニ</sub>于大辰西、及<sub>レ</sub>漢、申須曰、彗所<sub>ニ</sub>以除<sub>レ</sub>舊布<sub>ニ</sub>新也、天事恆象、今除<sub>ニ</sub>於火、火出必布焉、諸侯其有<sub>ニ</sub>火災<sub>ニ</sub>乎

とあり、星孛・客星・歲星等にかんする占を記して居り、哀公六年の條には楚の昭王の死を記した後に

是歲也、有<sub>レ</sub>雲如<sub>ニ</sub>衆赤鳥、夾<sub>レ</sub>日以飛三日、楚子使<sub>レ</sub>問<sub>ニ</sub>諸周大史、周大史曰、其當<sub>ニ</sub>王身<sub>ニ</sub>乎、若<sub>レ</sub>禘<sub>レ</sub>之、可<sub>レ</sub>移<sub>ニ</sub>於令尹司馬、王曰、除<sub>ニ</sub>腹心之疾<sub>ニ</sub>而實<sub>ニ</sub>諸股肱、何益、不穀不<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>大過、天其天<sub>レ</sub>諸、有<sub>レ</sub>罪受<sub>レ</sub>罰又焉移<sub>レ</sub>之、遂弗<sub>レ</sub>禘

とあり、太陽にかんする占を記してゐるが、同時に天人の關係にかんする思想をよく示して居り、その點讖緯とは縁故の淺からぬ記載である。併しながら又讖緯と異なる部分も多々あるのであつて、五行相勝の理は説いて符命は説かず、かの獲麟の條に於ても

十四年、春、西狩<sub>ニ</sub>於大野、叔孫氏之車子鉏商獲<sub>レ</sub>麟、以爲<sub>ニ</sub>不祥、以賜<sub>ニ</sub>虞人、仲尼觀<sub>レ</sub>之曰、麟也、然後取<sub>レ</sub>之

とあるのみで、その麟を得た者も叔孫子の車子鉏高とし、公羊が薪采者として孝經右契や尙書中候勅省圖等の緯書の記載に近いのとは異つてゐるのである。それは兎も角左傳は元來最も製作年代に議論の多い書であつて、飯島忠夫博士は前漢末劉歆の僞作とされたが、<sup>(廿九)</sup>新城新藏博士は西紀前三六五年以後、西紀前三二九年以前で、多分西紀前三百四五十年頃であらうとされ、<sup>(卅)</sup>橋本増吉教授は兩説を精密に批判された上、「左傳の中には三種の異つた要素が含まれて居る。一は戰國時代の材料二は漢初の材料三は漢末の材料である。言ひ換ふれば左傳は戰國の初期即ち凡そ西紀前三八六年頃から漢末迄の間に完成されたもので、本來戰國時代の著作であつた様に思はれるのであるけれども、漢代に於て多少の添加修飾を受

け、遂に現在の體裁を完成するに至つたものであらう<sup>(并二)</sup>とされて居り、カールグレン氏は言語學的研究により左傳の文法を分析し他の古典と比較して、左傳が獨特の終始一貫した文法を有して居ることを指摘し、かゝる文法は後世の僞作者によつて想像せられもしなければ又終りまで守り得るものでもないとし、それ故に左傳は同一の學派に屬し同一の言語を有する一人若しくは數人によつて書かれた眞の古典なりとし、その製作年代を以て西紀前四六八年(左傳中に取扱はれた最後の年)よりは新しく西紀前二一三年(始皇の燔書の年)よりは古く、多分西紀前四六八年と三百年の間に定められるものであらうとして<sup>(并三)</sup>ある。以上の諸賢の説を綜合するに左傳が決して劉歆の僞作でなく戰國時代に著作せられた事は確實のやうであるが、しかも漢代に附加せられた部分も決して皆無とは云へないやうであるし、殊に讖緯說的思想は寧ろそれあるが爲に漢代の附加を云々されるやうな立場にあるのであるから、到底その存在を以て左傳の時代に此の思想の存したことを證明する材料とはならないのであるが、併し左傳に見えてゐる讖緯說的思想の如きは讖緯說として必しも最も重要な部分ではなく、又後述の呂氏春秋等にその類似の思想を有するであり、従つてその戰國時代以來の存在が當然考へられるばかりでなく、戰國時代に存在したと考へていさ、かも不合理のない思想ばかりであるから、今は深く之を追求せずして他書の檢索に移らう。

左傳と密接な關係を有し、従つてその製作年代も同一と考へられてゐる國語には、先づ周語上に

幽王二年、西周三川皆震、伯陽父曰、周將亡矣、夫天地之氣、不<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>其序<sub>一</sub>、若過<sub>二</sub>其序<sub>一</sub>、民之亂<sub>レ</sub>之也、陽伏而不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>出、陰迫而不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>烝、於<sub>レ</sub>是有<sub>二</sub>地震<sub>一</sub>、今三川實震、是陽失<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>而鎮<sub>レ</sub>陰也、陽失而在<sub>レ</sub>陰川源必塞國必亡、夫水土演而民用也、水土無<sub>レ</sub>演、民乏<sub>二</sub>財用<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>亡何待、昔伊洛竭而夏亡、河竭而商亡、今周德若<sub>二</sub>三代之季<sub>一</sub>矣、其川源又塞、塞必竭、亡之徵也、川竭山必崩、若國亡不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>十年<sub>一</sub>、數之紀也、夫天之所<sub>レ</sub>棄、不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>其紀<sub>一</sub>、是歲也、三川竭、岐山崩、十一年、幽王乃滅、周乃東遷とあり、西周滅亡前の災異を陰陽說で説いて居り、同じく惠王十五年の條には

有<sub>レ</sub>神降<sub>二</sub>於莘<sub>一</sub>、王問<sub>二</sub>於內史過<sub>一</sub>曰、是何故、固有<sub>レ</sub>之乎、對曰、有<sub>レ</sub>之、國之將<sub>レ</sub>興、其君齋明衷正、精潔惠和、其德足<sub>二</sub>以昭<sub>二</sub>其馨香<sub>一</sub>、其惠足<sub>二</sub>以同<sub>二</sub>其民人<sub>一</sub>、神饗而民應、民神無<sub>レ</sub>怨、故明神降<sub>レ</sub>之、觀<sub>二</sub>其政德<sub>一</sub>、而布<sub>レ</sub>福焉、國之將<sub>レ</sub>亡、其君貧冒辟邪、淫佚荒怠、麤穢暴虐、其政腥臊、馨香不<sub>レ</sub>登、前刑矯誣、百姓攜貳、明神弗<sub>レ</sub>蠲、而民有<sub>二</sub>遠志<sub>一</sub>、民神怨痛、無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>依懷<sub>一</sub>、故神亦往焉、觀<sub>二</sub>其苛慝<sub>一</sub>、而降<sub>二</sub>之禍<sub>一</sub>、是以或見<sub>レ</sub>神以興、亦或以亡、昔夏之興也、融降<sub>二</sub>於崇山<sub>一</sub>、其亡也、回祿信<sub>二</sub>於聆隧<sub>一</sub>、商之興也、禱杙次<sub>二</sub>於丕山<sub>一</sub>、其亡也、夷羊在<sub>レ</sub>牧、周之興也、鸞鷲鳴<sub>二</sub>於岐山<sub>一</sub>、其衰也、杜伯射<sub>二</sub>王於郟<sub>一</sub>、是皆明神之志者也

とあり、此の篇の思想は讖緯說や後述の墨子非攻篇の思想等とも類似してゐるのであり、その最後に記した「杜伯射王」の話は又墨子明鬼篇に他少異つた形式で詳述されてゐる。尙同條の後には此の神を以

て丹朱之神とし虢の滅亡の前兆とし、同十九年に虢の滅亡した事を記してゐるが、虢の滅亡に就いては晉語三にも

虢公夢、在<sub>レ</sub>廟、有<sub>レ</sub>神、人面白毛虎爪、執<sub>レ</sub>鉞立<sub>ニ</sub>於西阿<sub>一</sub>、公懼而走、神曰、無<sub>レ</sub>走、帝命曰、使<sub>ニ</sub>晉襲<sub>ニ</sub>於爾門<sub>一</sub>

とあり、六年後に晉が虢を亡した事を記してゐるのである。又周語下には晉の成公に就いて、

成公之生也、其母夢、神規<sub>ニ</sub>其臀<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>墨曰、使<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>晉國<sub>一</sub>、三者昇<sub>ニ</sub>驪之孫<sub>一</sub>、故名<sub>レ</sub>之曰<sub>ニ</sub>黑臀<sub>一</sub>等とあり、何れも讖緯説の讖にすこぶる類似した思想と思はれるのである。

次に吾々は墨子を一見しやう。後來讖緯を論じた諸家が遂に一言も此書に言及しなかつたのは、確に手脱りと云つてよい。それ程此の書は讖緯と相類似した思想を有してゐるのである。非攻下第十九を見るがよい。其處には次の如く記せられてゐるのである。

今還<sub>下</sub>夫好<sub>ニ</sub>攻伐<sub>一</sub>之君<sub>上</sub>、又飾<sub>ニ</sub>其説<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>子墨子<sub>一</sub>曰、以<sub>ニ</sub>攻伐<sub>一</sub>之爲<sub>ニ</sub>不義<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>物與、昔者禹征<sub>ニ</sub>有

苗<sub>一</sub>、湯伐<sub>レ</sub>桀、武王伐<sub>レ</sub>紂、此皆立爲<sub>ニ</sub>聖王<sub>一</sub>、是何故也、子墨子曰、子未<sub>レ</sub>察<sub>ニ</sub>吾言之類<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>明<sub>ニ</sub>其故<sub>一</sub>者也、

彼非<sub>ニ</sub>所謂攻<sub>一</sub>、謂<sub>レ</sub>誅也、昔者有<sub>ニ</sub>三苗<sub>一</sub>、大亂、天命殛<sub>レ</sub>之、日妖宵出、雨<sub>レ</sub>血<sub>三</sub>朝<sub>一</sub>、龍生<sub>レ</sub>廟、大哭<sub>ニ</sub>乎市<sub>一</sub>、

夏冰、地坼及<sub>レ</sub>泉、五穀變化、民乃大振、高陽乃命<sub>ニ</sub>元宮<sub>一</sub>、禹親把<sub>ニ</sub>天之瑞令<sub>一</sub>、以征<sub>ニ</sub>有苗<sub>一</sub>、四電誘<sub>レ</sub>祗、有

神人面鳥身若<sub>レ</sub>瑾以侍、搃矢有苗之祚、苗師大亂後乃遂幾、禹既已克<sub>ニ</sub>有三苗<sub>一</sub>焉、磨爲<sub>ニ</sub>山川<sub>一</sub>、別<sub>ニ</sub>物

上下、卿制<sub>二</sub>大極<sub>一</sub>、而神民不<sub>レ</sub>違、天下乃靜、則此禹之所<sub>二</sub>以征<sub>二</sub>有苗<sub>一</sub>也、還<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>夏王桀<sub>一</sub>、天有<sub>二</sub>韜命<sub>一</sub>、日月不<sub>レ</sub>時、寒暑雜至、五穀焦死、鬼呼<sub>レ</sub>國、鷓鳴十夕餘、天乃命<sub>二</sub>湯於鑪宮<sub>一</sub>、用受<sub>二</sub>夏之大命<sub>一</sub>、夏德大亂、豫既卒<sub>二</sub>其命於天<sub>一</sub>矣、往而誅<sub>レ</sub>之、必使<sub>二</sub>汝堪之<sub>一</sub>、湯焉敢奉<sub>二</sub>率其衆<sub>一</sub>、是以鄉<sub>二</sub>有夏之境<sub>一</sub>、帝乃使陰暴<sub>二</sub>毀有夏之城<sub>一</sub>、少少有<sub>レ</sub>神、來告曰、夏德大亂、往攻<sub>レ</sub>之、予必使<sub>二</sub>汝大堪之<sub>一</sub>、予既受<sub>二</sub>命於天<sub>一</sub>、天命<sub>レ</sub>融降<sub>二</sub>火于夏之城間西北之隅<sub>一</sub>、湯奉<sub>二</sub>桀衆<sub>一</sub>以克有、屬<sub>二</sub>諸侯於薄<sub>一</sub>、薦<sub>二</sub>章天命<sub>一</sub>、通<sub>二</sub>于四方<sub>一</sub>、而天下諸侯莫<sub>二</sub>敢不<sub>レ</sub>賓服<sub>一</sub>、則此湯之所<sub>二</sub>以誅<sub>レ</sub>桀也、還<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>乎商王紂<sub>一</sub>、天不<sub>レ</sub>序<sub>二</sub>其德<sub>一</sub>、祀用失<sub>レ</sub>時、兼夜中十日雨<sub>二</sub>土于薄<sub>一</sub>、九鼎遷止、婦妖宵出、有<sub>レ</sub>鬼宵吟、有<sub>レ</sub>女爲<sub>レ</sub>男、(并五)天雨<sub>レ</sub>肉、棘生<sub>二</sub>乎國<sub>一</sub>、遂<sub>二</sub>王兄自縱<sub>一</sub>也、赤烏銜<sub>レ</sub>珪、降<sub>二</sub>周之岐社<sub>一</sub>曰、天命<sub>二</sub>周文王<sub>一</sub>、伐<sub>レ</sub>殷有<sub>レ</sub>國、泰顛來賓、河出<sub>二</sub>綠圖<sub>一</sub>、地出<sub>二</sub>乘黃<sub>一</sub>、武王踐<sub>レ</sub>功、夢見<sub>二</sub>三神<sub>一</sub>、曰、予既沈<sub>二</sub>潰殷紂于酒德<sub>一</sub>矣、往攻<sub>レ</sub>之、予必使<sub>二</sub>汝大堪之<sub>一</sub>、武王乃攻<sub>二</sub>狂夫<sub>一</sub>、反商之周、天賜<sub>二</sub>武王黃鳥之旗<sub>一</sub>、王既已克<sub>レ</sub>殷、成<sub>二</sub>帝之來<sub>一</sub>、分<sub>二</sub>主諸神<sub>一</sub>、祀<sub>二</sub>紂先王<sub>一</sub>、通<sub>二</sub>維四夷<sub>一</sub>、而天下莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>賓焉、襲<sub>二</sub>湯之緒<sub>一</sub>、此既武王之所<sub>二</sub>以誅<sub>レ</sub>紂也、若以<sub>二</sub>三聖王物<sub>一</sub>觀<sub>レ</sub>之、則非<sub>二</sub>所謂攻<sub>一</sub>也、所謂誅也、即ちその災異、符命の思想に於て、天が聖王の勝利を豫言する點に於いて、實に讖緯說そのものを此處に見ると云つても過言ではない位であり、殊に註に於て説明せし如く災異の二三と周の赤鳥の符命の讖緯說中に取り入れられてゐる如き、河圖を出せしことを記してゐる如き、讖緯の起源此處に出づと云つても過言ではないのである。しからは墨子の此の篇は何時頃の製作に拘はり、それに記載せられた思想は

何時の時代に屬するものであらうか。墨子の製作年代に就いては、嘗て橋本増吉教授が「五行説の起源及發達」なる論文中に於て、諸家の説を網羅批判して、「要するに、墨子の時代は恐らく楚の惠王より齊の田和に互る時代に當るものであらうと推せられるのであるけれども、今の墨子の本文はその後戰國の中期末期に互り、墨學者流によりて傳承增益せられたもの」として居られるのであり、此の篇又「子墨子を非とし」とか「子墨子曰く」とか云つてゐるのであるから、その墨子の自著に非ずして、その門家者流の筆になることは勿論であらうが、同篇に「今天下好戰之國、齊晉楚越」とあるを見れば、既に清の汪中がその墨子序中に「明在勾踐稱伯之後、秦獻公未得志之前、全晉之時、三家未分、齊未爲陳氏也」と指摘したやうな、春秋末期乃至戰國初期の時代を想像せしむるものもあるのであるが、併しながら之は墨子の言として記せられてゐるのであるから、此の篇の製作年代はそれより下るものとしても、此の篇の符命が夏殷周と並記せられてゐるにも拘はらず、後述の呂氏春秋或は諸緯書の記載の如く何等五行相勝等によつてその受命説を説いてゐないことは、此の篇が決して戰國末期等の晚出のものでなく、況んや漢代等に附益せられたものでない事を示すものと考へられる。たゞ鳥を赤とし、地が乘黃を出したとする點に五行説の存在は認められるやうであり、五行説の起源を以て戰國中期即西紀前三百年代に於て發生せるものとすれば、此の條の製作年代も亦此の時期まで引き下げらるべきであらう。

次に上記の所説が果して墨家本來のものかどうかも一應研討の要があらう。淮南子要略訓には「墨子

學ニ儒者之業、受ニ孔子之術」とあり、此の篇中にも禹湯文武を云ひ、他篇に堯舜をも云ふ點等確かに儒家より受けたかと思はれる思想等もあるので、此の篇の思想も亦儒家の思想の一部ではなかつたかと云ふ疑問も起り得るわけであるが、此の篇の根本思想たるや、かの墨家の説の樞要たる兼愛に基づき、或ひはその兼愛の正しきを證明せんとして、上帝鬼神を説く所の、例へば法儀第四に

愛レ人利レ人者、天必福レ之、惡レ人賊レ人者、天必禍レ之、日殺ニ不辜ニ者、得ニ不祥ニ焉、夫奚説、人爲ニ其相殺、而天與レ禍乎、是以天欲ニ人相愛相利、而不レ欲ニ人相惡相賊ニ也、昔之聖王禹湯文武兼ニ愛天下百姓、率以尊レ天事レ鬼、其利レ人多、故天福レ之使ニ立爲ニ天子、天下諸侯皆賓ニ事之、暴王桀紂幽厲兼ニ惡天下之百姓、率以詬レ天侮レ鬼、賊ニ其人ニ多、故天禍レ之、使ニ遂失ニ其國家、身死爲レ僇ニ於天下、後世子孫毀レ之、至レ今不レ息

とあり、天志中第二十七に

夫愛レ人利レ人、順ニ天之意、得ニ天之賞ニ者誰也、曰若ニ昔三代聖王堯舜禹湯文武者是也、堯舜禹湯文武焉所從レ事、曰、從ニ事兼、不レ從ニ事別、兼者處ニ大國ニ不レ攻ニ小國、處ニ大家ニ不レ亂ニ小家、強不レ劫レ弱、衆不レ暴レ寡、詐不レ謀レ愚、貴不レ傲レ賤、觀ニ其事、上利ニ乎天、中利ニ乎鬼、下利ニ乎人、三利無レ所レ不利、是謂ニ天德、聚斂ニ天下之美名、而加レ之焉、曰、此仁也、義也、愛レ人利レ人順ニ天之意、得ニ天之賞ニ者也——中略——夫憎レ人賊レ人、反ニ天之意、得ニ天之罰ニ者誰也、曰若ニ昔者三代暴王桀紂幽厲



者是也、桀紂幽厲焉所從事、曰、從事別、不從事兼、別者處大國、則攻小國、處大家、則亂小家、強劫弱、衆暴寡、詐謀愚、貴傲賤、觀其事、上不利乎天、中不利乎鬼、下不利乎人、三不利無所利、是謂天賊、聚斂天下之醜名、而加之焉、曰、此非仁也、非義也、憎人賊人反天之意、得天之罰者也

とあり、明鬼下第三十一に

周宣王殺其臣杜伯而不辜、杜伯曰、吾君殺我而不辜、若以死者爲無知則止矣、若死而有知、不出三年、必使吾君知之、其三年周宣王合諸侯、而田於圃、田車數百乘、從數千人滿野、日中杜伯乘白馬素車、朱衣冠、執朱弓、挾朱矢、追周宣王、射入車上、中心折脊、殪車中、伏弢而死、當是之時、周人從者莫不見、遠者莫不聞、著在周之春秋、爲君者以教其臣、爲父者以教其子、曰、戒之慎之、凡殺不辜者、其得不祥、鬼神之誅、若此之慳邀也、以若書之說觀之、則鬼神之有、豈可疑哉、非惟若書之說爲然也、昔者鄭穆公當晝日中處乎廟、有神入門而左、鳥身、素服三絕、面狀正方、鄭穆公見之乃恐懼、神曰、無懼、帝享女明德、使子錫女壽十年有九、使若國家蕃昌子孫茂母失、鄭穆公再拜稽首曰、敢問神明、曰、予爲句芒、若以鄭穆公之所身見爲儀、則鬼神之有、豈可疑哉、非惟若書之說爲然也、昔者燕簡公殺其臣莊子儀而不辜、莊子儀曰、吾君王殺我而不辜、死人母知亦已、死人有知、不出三年、必使吾君知之、期年燕將馳祖、燕之有祖

當齊之社稷、宋之有桑林、楚之有中雲夢也、此男女之所屬而觀也、日中燕簡公方將馳於祖塗、莊子儀荷朱杖、而擊之、殪之車上、當是時、燕人從者莫不見、遠者莫不聞、著在燕之春秋、諸侯傳而語之曰、凡殺不辜者、其得不祥、鬼神之誅、若此其憺邀也、以若書之說觀之、則鬼神之有、豈可疑哉、非惟若書之說爲然也、昔者宋文君鮑之時、有臣曰祈觀辜、固嘗從事於厲、祿子杖揖出、與言曰、觀辜是何珪璧之不滿意、酒醴粢盛之不淨潔也、犧牲之不全肥、春秋冬夏選失時、豈女爲之與、意鮑爲之與、觀辜曰、鮑幼弱在荷緼之中、鮑何與識焉、官臣觀辜特爲之、祿子舉揖而稟之、殪之壇上、當是時、宋人從者莫不見、遠者莫不聞、著在宋之春秋、諸侯傳而語之曰、諸不敬慎祭祀者、鬼神之誅至、若此其憺邀也、以若書之說觀之、鬼神之有、豈可疑哉、非惟若書之說爲然也、昔者齊莊君之臣有所謂王里國、中里徼者、此二子者訟三年而獄不斷、齊君由謙殺之、恐不辜、猶謙釋恐、失有罪、乃使下之人共一羊盟齊之神社、二子許諾、於是油洟、搃羊而漉其血、讀王里國之辭、既已終矣、讀中里徼之辭未半也、羊起而觸之、折其腳、祧神之、而稟之、殪之盟所、當是時、齊人從者莫不見、遠者莫不聞、著在齊之春秋、諸侯傳而語之曰、請品先不以其請者、鬼神之誅至、若此其憺邀也、以若書之說觀之、鬼神之有、豈可疑哉

とあり、又同篇に

鬼神之罰不可恃、富貴衆強勇力強武堅甲利兵、鬼神之罰必勝之、若以爲不然、昔者夏王桀貴爲天

子<sub>二</sub>富有<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、上詬<sub>レ</sub>天侮<sub>レ</sub>鬼、下殃<sub>二</sub>傲天下之萬民<sub>一</sub>、祥<sub>二</sub>上帝<sub>一</sub>、伐<sub>二</sub>元山帝行<sub>一</sub>、故於<sub>レ</sub>此乎天乃使<sub>二</sub>湯至<sub>二</sub>明罰焉<sub>一</sub>、湯以<sub>二</sub>車九兩<sub>一</sub>、鳥陳雁行、湯乘<sub>二</sub>大贊<sub>一</sub>、犯遂下衆人之螭遂、王乎禽<sub>二</sub>推哆大戲<sub>一</sub>、故昔夏王桀貴爲<sub>二</sub>天子<sub>一</sub>、富有<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>勇力之人推哆大戲<sub>一</sub>、主<sub>二</sub>別兇虎<sub>一</sub>、指畫殺<sub>レ</sub>人、人民之衆兆億侯盈<sub>二</sub>厥澤陵<sub>一</sub>、然不能<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>此圍<sub>二</sub>鬼神之誅<sub>一</sub>、此吾所謂鬼神之罰不可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>富貴衆強勇力强武堅甲利兵<sub>一</sub>者此也、且不<sub>二</sub>惟此爲<sub>レ</sub>然、昔者殷王紂貴爲<sub>二</sub>天子<sub>一</sub>、富有<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、上詬<sub>レ</sub>天侮<sub>レ</sub>鬼、下殃<sub>二</sub>傲天下之萬民<sub>一</sub>、播<sub>二</sub>棄黎老<sub>一</sub>、賊<sub>二</sub>誅該子<sub>一</sub>、楚<sub>二</sub>毒無罪<sub>一</sub>、刳<sub>二</sub>剔孕婦<sub>一</sub>、庶舊鰥寡號咷無<sub>レ</sub>告也、故於<sub>レ</sub>此乎天乃使<sub>二</sub>武王至<sub>二</sub>明罰焉<sub>一</sub>、武王以<sub>二</sub>擇車百兩虎賁之率四百人<sub>一</sub>、先<sub>二</sub>庶國節<sub>一</sub>、窮<sub>レ</sub>戎、與<sub>二</sub>殷人<sub>一</sub>戰<sub>二</sub>乎牧之野<sub>一</sub>、王乎禽<sub>二</sub>費中惡來<sub>一</sub>、衆畔百走、武王逐奔入<sub>レ</sub>宮、萬年梓株、折<sub>レ</sub>紂而繫<sub>二</sub>之赤環<sub>一</sub>、載<sub>二</sub>白旗<sub>一</sub>以爲<sub>二</sub>天下諸侯<sub>一</sub>、故昔者殷王紂貴爲<sub>二</sub>天子<sub>一</sub>、富有<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>勇力之人費中惡來崇侯虎<sub>一</sub>、指寡殺<sub>レ</sub>人、人民之衆兆億侯盈<sub>二</sub>厥澤陵<sub>一</sub>、然不能<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>此圍<sub>二</sub>鬼神之誅<sub>一</sub>、此吾所<sub>レ</sub>謂鬼神之罰不可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>富貴衆強勇力强武堅甲利兵<sub>一</sub>者此也。

等とあるやうな思想即天帝鬼神の明罰覲面に降ると云ふ思想であるから、墨家の主要なる思想中の兼愛・明鬼の思想に充分連絡を有するのであり、一方鬼神の存在を認めつゝも敢て之を強調せず、且つ所謂「怪力亂神」を語らなかつた孔子の思想や、桀紂湯武を説いて符命を説かなかつた孟子や、又かの荀子天論篇第十七に

治亂天耶、曰、日月星辰瑞曆、是禹桀之所<sub>レ</sub>同也、禹以治、桀以亂

とか

星墜木鳴、國人皆恐曰、是何也、曰、無<sub>レ</sub>何也、是天地之變、陰陽之化、物之罕至者也、怪<sub>レ</sub>之可也、畏<sub>レ</sub>之非也、夫日月之有<sub>レ</sub>蝕、風雨之不<sub>レ</sub>時、怪星之黨見、是無<sub>レ</sub>世而不<sub>レ</sub>常有<sub>レ</sub>之、上明而政平、則是雖並<sub>レ</sub>世起、無<sub>レ</sub>傷也、上闇而政險、則是雖<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>一至者、無<sub>レ</sub>益也

等とある荀子の思想とは甚しく異つてゐるのを知るのである。しからは墨子非攻篇の思想は少くとも儒家の正統思想ではないやうであり、その大部分が墨家の思想なることは明かであるが、しかも此の篇の思想たる漢代以後の儒家の思想に近きものがあるのであり、恐く漢初の思想界の混亂が陰陽思想五行思想占星術或は道家の説その他を儒家に併せしと同様かゝる墨家の思想等も、その禹湯文武等を説く點から牽入れることゝなつたかと思はれるのであるが、しかも又儒家の一部に鬼神を強調するものがあり、偶墨子にそれが現はれたのであり、しかもその派の末流が漢代において隆盛を極めたとも考へ得られるわけであり、要するに既に戦國時代の如く各種の思想が並存し盛行した時代において、明確に某家の思想と斷することは少からず困難なのであるが、それはともかく、讖緯説の重要な素材となつたかと思はれる思想の既に墨子中に見えることは頗る注目すべきことゝ云はなければならぬのである。

その他列子天瑞第一に

昔者聖人因<sub>レ</sub>陰陽、以統<sub>レ</sub>天地、夫有<sub>レ</sub>形者生<sub>レ</sub>於無形、則天地安從生、故曰、有<sub>レ</sub>太易、有<sub>レ</sub>太初、有<sub>レ</sub>

太始<sup>一</sup>有<sup>二</sup>太素、太易者未<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>氣也、太初者氣之初也、太始者形之始也、太素者質之始也、氣形質具、而未<sup>二</sup>相離、故曰<sup>三</sup>渾淪、渾淪者、言<sup>三</sup>萬物相渾淪、而未<sup>二</sup>相離<sup>一</sup>也、視<sup>レ</sup>之不見、聽<sup>レ</sup>之不聞、編<sup>レ</sup>之不得、故曰<sup>レ</sup>易也、易無形埒、易變而爲<sup>レ</sup>一、一變而爲<sup>レ</sup>七、七變而爲<sup>レ</sup>九、九變者究也、乃復變而爲<sup>レ</sup>一、一者形變之始也、清輕者上爲<sup>レ</sup>天、濁重者下爲<sup>レ</sup>地

とある文が、僅少の増減を以て易緯乾鑿度卷上に取り入れられてゐるのであり、かゝる例は他書にも見えるやうであるが、何れも讖緯説として重要な部分ではないのであるから、暫く省略に従ふことゝして、秦漢の書の探索に進む事としよう。

#### 四 秦 讖

##### 上 呂氏春秋檢索

次に秦代に就いて見るに、吾々は比較的製作年代の明瞭な呂氏春秋を有するのである。即ち橋本増吉教授は川合教授還曆記念論文集所載「五行説の起源及び發達」中に於て

この書は呂不韋が秦の丞相となつた莊襄王元年(西紀前二四九年)、即ち秦が東西周君を滅して、全く周の祀を絶つた時から、秦王政(始皇帝)の十年(西紀前二三七年)十月、呂不韋が相國を免せられた時まで、十三年の間に編纂せられたものであり、恐くその丞相となつた後、問もなく著手せられ、

秦王政の初年、西紀前二四〇年頃までに、完成されしものと推せられるので、(史記呂不韋傳にはこの記事のすぐ後に、始皇帝七年即ち西紀前二四〇年の記事が出てゐるのである。もし序意篇に「維秦八年、歲在涪灘、秋甲子朔」とある記事を認めるとすれば、秦の八年即ち西紀前二三九年以後に編纂されたこととなるのである)云々と論せられてゐるのである。

今呂氏春秋中讖緯説と親縁ありと思はれる記載を求むるに、その十二月紀の各首篇たる月令は、讖緯説中に見える時令とは大いに異なるのであるが、此の書の月令が陰陽五行思想による凡ゆる時令的思想の綜合であり總集成であり、或は五行説の配當整理を目的としたかと思はれる完備したものであるから、是以前に當然より簡單な不完全なものがあつたと考へられるので、かゝるものと緯書に見える時令であるとか管子四時第四十等に見える時令であるとか云つたものとは何等かの關係を有するものであらうと思はれる。又季夏記の制樂には

成湯之時有穀生於庭、昏而生、比旦而大拱、其吏請卜其故、湯退卜者曰、吾聞祥者福之先者也、見祥而爲不善、則福不至、妖者禍之先者也、見妖而爲善、則禍不至、於是早朝晏退、問疾、弔喪、務鎮撫百姓、三日穀亡

周文王立國八年、歲六月、文王寢疾、五日而地動、東西南北、不出國郊、百吏皆請曰、臣聞地

之動、爲人主也、今王寢疾、五日而地動、四面不出周郊、羣臣皆恐曰、請移之、文王曰、若何其移之也、對曰、興事動衆、以增國城、其可以移之乎、文王曰不可、夫天之見妖也、以罰有罪也、我必有罪、故天以此罰我也、今故興事動衆、以增國城、是重我罪也、不可、文王曰、昌也請改行重善以移之、其可以免乎、於是謹其禮、秩皮革、以交諸侯、飭其辭令、幣帛以禮豪士、領其爵列等級田疇、以賞羣臣、無幾何疾乃止

宋景公之時、熒惑在<sub>レ</sub>心、公懼、召<sub>二</sub>子韋<sub>一</sub>而問<sub>レ</sub>焉曰、熒惑在<sub>レ</sub>心何也、子韋曰、熒惑者天罰也、心者宋之分野也、禍當<sub>二</sub>於君<sub>一</sub>、雖然可<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>於宰相<sub>一</sub>、公曰宰相所<sub>二</sub>與治<sub>二</sub>國家<sub>一</sub>也、而移<sub>レ</sub>死焉不祥、子韋曰、可<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>於民<sub>一</sub>、公曰、民死、寡人將<sub>二</sub>誰爲<sub>レ</sub>君乎、寧獨死、子韋曰、可<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>於歲<sub>一</sub>、公曰、歲害則民饑、民饑必死、爲<sub>二</sub>人君<sub>一</sub>、而殺<sub>二</sub>其民<sub>一</sub>、以自活也、其誰以<sub>レ</sub>我爲<sub>レ</sub>君乎、是寡人之命固盡已、子無<sub>二</sub>復言<sub>一</sub>矣、子韋還走、北面載拜曰、臣敢賀<sub>レ</sub>君、天之處<sub>レ</sub>高而聽<sub>レ</sub>卑、君有<sub>二</sub>至德之言<sub>一</sub>、天必<sub>二</sub>賞<sub>レ</sub>君、今昔熒惑其徙<sub>二</sub>三舍<sub>一</sub>、君延<sub>レ</sub>年二十一歲、公曰、子何以知<sub>レ</sub>之、對曰、有<sub>二</sub>三善言<sub>一</sub>、必有<sub>二</sub>三賞<sub>一</sub>、熒惑必<sub>二</sub>徙<sub>レ</sub>舍、舍行七星、星一徙當<sub>二</sub>七年<sub>一</sub>、三七二十一、臣故曰、君延<sub>レ</sub>年二十一歲矣、臣請伏<sub>二</sub>於陛下<sub>一</sub>、以伺<sub>二</sub>候<sub>一</sub>之、熒惑不<sub>レ</sub>徙臣請死、公曰可、是夕熒惑果徙<sub>二</sub>三舍<sub>一</sub>

とあり、その災異の思想の讖緯說に類するを見るのであるが、(四十三)同季の次篇明理には

衆正之所<sub>レ</sub>積、其福無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及也、衆邪之所<sub>レ</sub>積、其禍無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>逮也、其風雨則不<sub>レ</sub>適、其甘雨則不<sub>レ</sub>降、

其霜雪則不<sub>レ</sub>時、寒暑則不<sub>レ</sub>當、陰陽失<sub>レ</sub>次、四時易<sub>レ</sub>節、人民淫<sub>レ</sub>爍不<sub>レ</sub>同、禽獸胎消不<sub>レ</sub>殖、草木庫小不<sub>レ</sub>滋、五穀萎則不<sub>レ</sub>成、其以爲<sub>レ</sub>樂也、若<sub>レ</sub>之何哉、故至亂之化、君臣相賊、長少相殺、父子相忽、弟兄相誣、知交相倒、夫妻相冒、日以相危、失<sub>レ</sub>人之紀、心若<sub>レ</sub>禽獸、長邪苟<sub>レ</sub>利、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>義理、其雲狀有<sub>レ</sub>下若<sub>レ</sub>犬若<sub>レ</sub>馬、若<sub>レ</sub>白鵠、若<sub>レ</sub>衆車、有<sub>レ</sub>其狀若<sub>レ</sub>人、蒼衣赤首不<sub>レ</sub>動、其名曰<sub>レ</sub>天衡、有<sub>レ</sub>其狀若<sub>レ</sub>懸旂而赤、其名曰<sub>レ</sub>雲旂、有<sub>レ</sub>其狀若<sub>レ</sub>衆馬以鬪、其名曰<sub>レ</sub>混馬、有<sub>レ</sub>其狀若<sub>レ</sub>衆植華以長、黃上白下、其名蚩尤之旗、其日有<sub>レ</sub>鬪蝕、有<sub>レ</sub>倍僑、有<sub>レ</sub>暈珥、有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>光、有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>景、有<sub>レ</sub>衆日竝出、有<sub>レ</sub>晝盲、有<sub>レ</sub>霄見、其月有<sub>レ</sub>薄蝕、有<sub>レ</sub>暉珥、有<sub>レ</sub>偏盲、有<sub>レ</sub>四月竝出、有<sub>レ</sub>二月竝見、有<sub>レ</sub>小月承<sub>レ</sub>大月、有<sub>レ</sub>大月承<sub>レ</sub>小月、有<sub>レ</sub>月蝕<sub>レ</sub>星、有<sub>レ</sub>出而無<sub>レ</sub>光、其星有<sub>レ</sub>熒惑、有<sub>レ</sub>彗星、有<sub>レ</sub>天棊、有<sub>レ</sub>天櫬、有<sub>レ</sub>天竹、有<sub>レ</sub>天英、有<sub>レ</sub>天干、有<sub>レ</sub>賊星、有<sub>レ</sub>鬪星、有<sub>レ</sub>賓星——中略——國有<sub>レ</sub>此物、其主不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>驚惶亟革、上帝降<sub>レ</sub>禍、凶災必亟、其殘亡死喪、殄絕無<sub>レ</sub>類、流散循饑無<sub>レ</sub>日矣、此皆亂國之所<sub>レ</sub>生也

とあつて、多くの妖祥災異を述べて居り、その思想と、殊にその天文星占上のものとは多く讖緯説のものと同じなのであり、讖緯説中の天文星占の古く戦國時代以來の傳を承けたものであることを示してゐるのである。又有始覽には

何謂<sub>レ</sub>九野、中央曰<sub>レ</sub>鈞天、其星角亢氏——以下略

と大體尙書緯考靈耀中の九野の説と等しきものを有してゐるのである。



併しながら呂氏春秋と讖緯説とをより一層強く結びつけるものは同覽次篇の應同に

凡帝王者之將興也、天必先見祥乎下民、黃帝之時天先見大螾大螻、黃帝曰、土氣勝、土氣勝故、

其色尙黃、其事則土、及禹之時、天先見草木、秋冬不殺、禹曰、木氣勝、木氣勝故、其色尙

青、其事則木、及湯之時、天先見金刀、生於水、湯曰、金氣勝、金氣勝故、其色尙白、其事

則金、及文主之時、天先見火赤鳥、銜丹書、集于周社、文王曰、火氣勝、火氣勝故、其色尙赤、

其事則火、代火者必將水、天且先見水氣勝、水氣勝故、其色尙黑、其事則水、水氣至、而不

知數備、將徙于土、

とある、五行相勝による帝王受命の説であつて、殊に文王の場合の祥として、赤烏・丹書を擧げてゐるのは讖緯説に於ける文王の符命(四十四)と全く等しいのであり、且つ之を前記墨子非攻篇の「赤烏銜珪」の符命と比較する時、墨子と異り各帝の符命が五行相勝によつて説かれてゐる點、又「珪」が一層火徳にふさしい「丹書」に變へられてゐる點に、その時代の差を觀取し得るものがあるのであり、恐らく墨子所載の如き古傳に五行相勝説が加はつて呂覽の説となつたものと思はれ、此の條は墨子の説と讖緯説とを連絡する中間型と見られるばかりでなく、實に此の記載あるが爲に赤烏の説の戰國以來の存在を證明し得る事となり、前記の如く讖緯に類似した墨子中の思想を漢代の附益と誤らない一つの證據となつてゐるのであり、先秦の思想を検する一箇の標準としての呂氏春秋の價値を示す一例ともなつてゐるのであ

る。尙同篇には

夫覆<sub>レ</sub>巢毀<sub>レ</sub>卵、則鳳凰不<sub>レ</sub>至、刳<sub>レ</sub>獸食<sub>レ</sub>胎、則麒麟不<sub>レ</sub>至、乾<sub>レ</sub>澤涸<sub>レ</sub>漁、則龜龍不<sub>レ</sub>往

とあり、恃君覽「觀表」には

人亦有<sub>レ</sub>徵、事與<sub>レ</sub>國皆有<sub>レ</sub>徵、聖人上知<sub>三</sub>千歲、下知<sub>三</sub>千歲、非<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>之也、蓋有<sub>三</sub>自云<sub>一</sub>也、綠圖幡薄從<sub>レ</sub>此生矣

とあり、聖人が下千歳を知り自ら豫言をする事を記してゐるのであり、此の考こそ、孔子が緯書を書いておいたとか、讖を記したとか云ふ考の本をなしたかと思はれるのであり、讖緯とは實に密接な關係のある考であらう。

かくの如く我々は戰國末期より秦代にかけて讖緯說的思想の確に存在した事を伺ひ知り得たかの如くであるが、尙次に史記の此の時代にかんする記載を併せ檢する事も亦必要と思はれるのである。

#### 下 史記に現はれたる讖言

史記趙世家には

趙簡子疾、五日不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>人、大夫皆懼、醫扁鵲視<sub>レ</sub>之出、董安于問、扁鵲曰、血脈治也、而何怪、在昔秦繆公嘗如<sub>レ</sub>之、七日而寤、寤之日、告<sub>三</sub>公孫支與<sub>三</sub>子輿<sub>一</sub>曰、我之<sub>三</sub>帝所<sub>一</sub>、甚樂、吾所<sub>三</sub>以久<sub>一</sub>者、適有<sub>レ</sub>學也、帝告<sub>レ</sub>我、晉國將<sub>三</sub>大亂<sub>一</sub>、五世不<sub>レ</sub>安、其後將<sub>レ</sub>霸、未<sub>レ</sub>老而死、霸者之子且令<sub>三</sub>而國男女無<sub>レ</sub>別、

公孫支書而藏之、秦讖於<sub>レ</sub>是出矣、獻公之亂、文公之霸、而襄公敗<sub>レ</sub>秦師於穀<sub>レ</sub>而歸縱<sub>レ</sub>淫、此子之所聞、今主君之疾與<sub>レ</sub>之同、不出<sub>レ</sub>三日、疾必間、間必有<sub>レ</sub>言也、居<sub>レ</sub>二日半、簡子寤、語<sub>レ</sub>大夫<sub>レ</sub>曰、我之<sub>レ</sub>帝所、甚樂、與<sub>レ</sub>百神<sub>レ</sub>游<sub>レ</sub>於釣天、廣樂九奏萬舞、不<sub>レ</sub>類<sub>レ</sub>三代之樂、其聲動<sub>レ</sub>人心、有<sub>レ</sub>一熊<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>援<sub>レ</sub>我、帝命<sub>レ</sub>我射<sub>レ</sub>之、中<sub>レ</sub>熊、熊死、又有<sub>レ</sub>一羆<sub>レ</sub>來、我又射<sub>レ</sub>之、中<sub>レ</sub>羆、羆死、帝甚喜、賜<sub>レ</sub>我二筥、皆有<sub>レ</sub>副、吾見<sub>レ</sub>兒在<sub>レ</sub>帝側、帝屬<sub>レ</sub>我一翟犬<sub>レ</sub>曰、及<sub>レ</sub>而子之壯<sub>レ</sub>也、以<sub>レ</sub>賜<sub>レ</sub>之、帝告<sub>レ</sub>我、晉國且<sub>レ</sub>世衰、七世而亡、嬴姓將<sub>レ</sub>大敗<sub>レ</sub>周人於范魁之西、而亦不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>有也、今余思<sub>レ</sub>虞舜之勳、適余將<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>其胄女孟姚<sub>レ</sub>配<sub>レ</sub>而七世之孫<sub>レ</sub>董安于受<sub>レ</sub>言、而書藏<sub>レ</sub>之、以<sub>レ</sub>扁鵲言<sub>レ</sub>告<sub>レ</sub>簡子、簡子賜<sub>レ</sub>扁鵲田四萬畝、他日簡子出、有<sub>レ</sub>人當<sub>レ</sub>道、辟<sub>レ</sub>之不去、從者怒將<sub>レ</sub>刀<sub>レ</sub>之、當<sub>レ</sub>道者曰、吾欲<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>謁<sub>レ</sub>於主君、從者以聞、簡子召<sub>レ</sub>之曰、謔吾有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>子晰也、當<sub>レ</sub>道者曰、屏<sub>レ</sub>左右、願有<sub>レ</sub>謁、簡子屏<sub>レ</sub>人、當<sub>レ</sub>道者曰、主君之疾、臣在<sub>レ</sub>帝側、簡子曰、然有<sub>レ</sub>之、子之見<sub>レ</sub>我、我何爲、當<sub>レ</sub>道者曰、帝令<sub>レ</sub>主君射<sub>レ</sub>熊與<sub>レ</sub>羆、皆死、簡子曰、是且何也、當<sub>レ</sub>道者曰、晉國且<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>大難、主君首<sub>レ</sub>之、帝令<sub>レ</sub>主君滅<sub>レ</sub>二卿、夫熊與<sub>レ</sub>羆皆其祖也、簡子曰、帝賜<sub>レ</sub>我二筥、皆有<sub>レ</sub>副何也、當<sub>レ</sub>道者曰、主君之子將<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>二國於翟、皆子姓也、簡子曰、我見<sub>レ</sub>兒在<sub>レ</sub>帝側、帝屬<sub>レ</sub>我一翟犬<sub>レ</sub>曰、及<sub>レ</sub>而子之長<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>賜<sub>レ</sub>之、夫兒何謂<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>賜<sub>レ</sub>翟犬、當<sub>レ</sub>道者曰、兒主君之子也、翟犬者代之先也、主君之子且<sub>レ</sub>必有<sub>レ</sub>代、及<sub>レ</sub>主君之後嗣、且<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>革<sub>レ</sub>政而胡服、并<sub>レ</sub>二國於翟、簡子問<sub>レ</sub>其姓、而延<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>官、當<sub>レ</sub>道者曰、臣野人、致<sub>レ</sub>帝命<sub>レ</sub>耳、遂不<sub>レ</sub>見、簡子書藏<sub>レ</sub>之府、

とあつて、秦の繆公と趙簡子にかんする上帝の豫言を記してゐるのであり、讖と云ふ文字の實際用ひられてゐる例としても、此の條等その早いものと思はれるのである。秦の繆公は史記の十二諸侯年表によつて數へると西紀前六六〇年から六二二年に互つて在位して居り、即ち春秋時代の中頃以前の人であり、趙簡子は春秋末期から戰國初期にかけての人であり、是等の話を以て、直にこれらの時代にまで遡らしめることは不可能としても、相當古い時代から讖の傳を有するものと思はれるのである。

又史記始皇本記には三十二年の條に

燕人盧生使入海還、以鬼神事、因奏錄圖書曰、亡秦者胡也、始皇乃使將軍蒙恬發兵三十萬人北擊胡

とあり、同紀三十六年の條には

熒惑守心、有墜星、下東郡、至地爲石、黔首或刻其石曰、始皇帝死而地分

とあり、又同年の後には

秋使者從關東夜過華陰平舒道、有人持璧、遮使者曰、爲吾遺瀉池君、因言曰、明年祖龍歿、使者問其故、因忽不見置其璧去——中略——使御府視璧、乃二十八年、行渡江所沈璧也とあり、瀉池君に就いては張晏は

武王居鎬、鎬池君則武王也、武王伐商、故神云、始皇荒淫若紂矣、今亦可伐也

と注し、索隱には

按服虔之水神是也、江神以壁遺鎬池之神、告始皇之將終也、且秦水德王、故其君將亡、水神先自相告也

とあり、「祖龍死なん」に就いては蘇林の注に

祖始也、龍人君象、謂始皇也

とあり、始皇の死を豫言せる讖としてゐるのである。史記は勿論呂氏春秋と異つて、秦代の思想事件を見る直接の史料とはならないのであるが、史記六國表の序には司馬遷が秦記を讀んだことを記してゐるのであるし、始皇本紀その他を見ても、始皇帝時代の記事はかなり詳細な記録に基いたものと思はれるのであり、たとへこれらの話が後に附會せられ勝な話としても、必しも秦代に讖言がなかつたとは斷せられないのであり、呂氏春秋の諸例と相まつて戰國末期(四十五)より秦代にかけて、緯の名稱こそなければ、その内容に於て頗る讖緯説に類する思想を有したと見るのが寧ろ穩當かと思はれるのである。(未完)

(註一) 東洋學報第二卷第二號(明治四十五年五月)「漢代の曆法より見たる左傳の偽作」

(註二) 支那文化史講話 大正十三年

(註三) 高瀬博士還曆記念支那學論叢「河圖洛書に就て」昭和三年

(註四) 現代史學大系第十二卷 東洋史精粹 昭和六年

(註五) 川合教授還曆記念論文集「白帝の子赤帝の子に斬らるといふ説話について」昭和六年

(註六) 世界歴史大系第三卷 東洋古代史 昭和八年

(註七) 東洋學報第一〇卷(大正九年)「修訂現存讖緯書目一覽」

(註八) 頁七四參照

(註九) 日抱載とは孝經緯援神契卷下に

王者德至<sub>ニ</sub>於天<sub>ハ</sub>、則日抱載

とあり、註には「在<sub>レ</sub>上日<sub>レ</sub>載、在<sub>レ</sub>旁日<sub>レ</sub>抱」とあるのみであるが、同條の下に「黃氣抱<sub>レ</sub>日」とあるを以て見れば、日の上若しくは横に一種の氣のあることを意味するらしい。

(註十) 史學第十二卷第四號所載拙稿「讖緯說と陰陽五行說」頁一一一—一二〇參照

(註十一) 讖は説文に驗也とあり、辭源に「兆也、如<sub>ニ</sub>符讖圖讖等<sub>ハ</sub>、皆言<sub>ニ</sub>將來得失之兆<sub>一</sub>也」とあり、同書の讖語は預言也とあり、將來の事を記した文である。

(註十二) 註十に同じ同論文頁一一七參照

(註十三) 項羽に就いては

自號之王霸、姓有<sub>レ</sub>工(尙書中候霸免)

とあり、張良に就いては

漢之一師爲<sub>ニ</sub>張良<sub>一</sub>、主<sub>ニ</sub>韓之陂<sub>一</sub>、漢以興(春秋緯保乾圖)

とある。

(註十四) 漢大興之道、在<sub>ニ</sub>九代之王<sub>一</sub>、封<sub>ニ</sub>於太山<sub>一</sub>、刻<sub>レ</sub>石、著<sub>レ</sub>紀、禪<sub>ニ</sub>於梁父<sub>一</sub>、退省考<sub>レ</sub>功(河圖會昌符)

赤九會<sub>レ</sub>昌、十世以光、十一以興(河圖篇名缺)

(註十五) 前掲拙稿頁九九參照

讖緯說の起源及び發達(一)(杉本)

(三七)

九九

(註十六) 同前 頁九七—九八及び一〇九—一一〇參照

(註十七) 日暈は氣の日の周圍を取巻くことであり、日冠以下は漢書天文志の如淳の注に「凡氣在日上爲冠、爲載、在旁直對爲珥、在旁如半鑲一向日爲拖、向外爲背、有氣刺日爲鏑、鏑扶傷也」とあるを參照すればその如何なるものか判る。日華・日刺は日鏑の類であらう。

(註十八) 孝經內事圖に

日出東方二竿、亭亭無光、爲日病、未入二竿、亭亭無光、爲日死、日死君死、日病君病とある。

(註十九) 前記拙稿頁一〇二—一〇六參照

(註二十) 同前頁一二〇—一二三參照

(註廿一) 五嶽之神聖、四瀆之精仁、河者水之伯、上應天漢、太山天帝孫也、主召人魂、東方萬物始、故知人生命之長短

(註廿二) 瑞祥・符命・庶徵・災異・禮樂・星占等の諸要素は皆明かに天人感應の思想を有してゐる。

(註廿三) 前記拙稿頁一〇六及び一二三—一二五參照

(註廿四) 董仲序の對策には

書曰、白魚入於王舟、有火復於王屋、流爲鳥、此蓋受命之符也

としてゐるが現在の尙書には符命を説いた所は一つもない。

(註廿五) 卜筮そのものは必しも讖緯説と關係が薄いと雖難いが、たゞ讖緯説に於ける豫言は甚だ奇怪な神祕的な條件の本に表はれるやうに説かれてゐて、卜筮の如く豫め習熟された方法によつて豫言するものとは甚だ趣を異にしてゐる。

(註廿六) 現存緯書には手文を記したものはない。併しその神祕的な文字と豫言と云ふ意味で之と極めて縁故の深いことは認め得られると思ふ。

讖緯説の盛行した王莽の時代に、甄豊の子尋の手理に「天子」の字あると云ふを、莽が之を見て「一大子」若しくは「六子」とし、六は戮で、尋父子が當に戮死すべきを示すものとしたと云ふことが漢書王莽傳建國元年の條に見えてゐる。

(註廿七)

春秋緯感精符に

星孛入北斗、兵大起、將有以<sub>レ</sub>外制<sub>レ</sub>權以<sub>レ</sub>兵爲<sub>レ</sub>政者。

とあり、その占は異つてゐるが、大體の思想は類似してゐる。

(註廿八)

杜注に「客星也、不<sub>レ</sub>書非<sub>レ</sub>孛」とあり、春秋緯文耀鉤や元命苞等にも見える客星であるらしい。客星は辭源に「素非<sub>レ</sub>習見<sub>レ</sub>而忽見之星也」と説明されてゐる。

(註廿九)

飯島博士「漢代の曆法より見たる左傳の僞作」(東洋學報第二卷第一—二號「再び左傳著作の時代を論ず」)(東洋學報第九卷第二卷)

(註卅)

新城博士「歲星の記事によりて左傳國語の製作時代と干支紀年法の發達を論ず」(藝文大正七年十一月及十二月號)

(註卅一)

橋本教授「左傳の製作年代に就いて」(史學雜誌第三十一編第一號二號及七號八號)

(註卅二)

Bernhard Karlgren; On the Authenticity and Nature of the Tso Chuan

(註卅三)

尙書中候洛予命にも「雨<sub>レ</sub>血」の災異を記してゐる。

(註卅四)

尙書中候に

殷紂時、十日雨<sub>ニ</sub>土<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>亳<sub>ニ</sub>、紂竟滅<sub>レ</sub>國

とあり。

(註卅五)

春秋緯潛潭巴に「女子化爲<sub>ニ</sub>丈夫<sub>ニ</sub>」の異變を記してゐる。

(註卅六)

赤烏若しくは赤雀の符命は洛書緯靈准聽・易緯乾元序制記・尙書中候我應・尙書中候合符后等に見えてゐる。著者前掲論文頁一一四—一一五參照。又後述の呂氏春秋有始覽應同には

讖緯説の起源及び發達(一)(杉本)



文王之時、天先見<sub>二</sub>火赤烏<sub>一</sub>、銜<sub>二</sub>丹書<sub>一</sub>、集<sub>二</sub>于周社<sub>一</sub>

とあり。墨子の文に最も近いのである。呂覽の此の條は五行相勝説を記してゐるものやうであるが、その際此の墨子所傳の如き記載を採用したものであらう。

(註卅七) 詳しくは川合教授還曆記念論文集頁五七三—五八二参照

(註卅八) 春秋末期に墨子がかゝる言を述べたのを、後に門家者流が採録したと見る見方と、採録した時代がかゝる春秋末期であつたので、その時代の情況がそのまま表はれたとする見方と、後世の門家者流が墨子の時代を頭に置いて、かゝる情況を記したと見る見方と三通りあり得るわけであり、第一及び第二の場合ならば、墨子非攻篇に記載せられた思想そのものは春秋末期のものとして云ひ得るのであるが、此處には讓歩して、假りに第三を採つたのである。

(註卅九) 五行相勝説そのものは孟子告子章句上に「仁之勝<sub>二</sub>不仁<sub>一</sub>也、猶<sub>二</sub>水勝<sub>二</sub>火<sub>一</sub>」とあり、孫子虛實篇に「五行無<sub>二</sub>常勝<sub>一</sub>」等とあり、戰國中期即ち西紀前三百年代まで遡り得るわけであるが、相勝を以て王朝受命を説くものは呂氏春秋が初見である。

(此の項橋本教授前記論文による)

(註四十) 若し此の條が漢代等に製作せられたならば必ずや禹の符命、湯の符命等にも五行説的色彩が加へられてゐる筈である。

(註四十一) 飯島博士橋本教授等何れも此の説を持してゐられる。

(註四十二) 孟子梁惠王下、滕文公下、離婁上

(註四十三) 易緯稽覽圖に

凡異所<sub>レ</sub>生、災所<sub>レ</sub>起、各以<sub>二</sub>其政<sub>一</sub>變<sub>レ</sub>之、則除、其不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>變、則施<sub>レ</sub>之亦除

とあり、大體の思想の類似を見るのであり、地震に就いては春秋緯潛潭巴に

地震—中略—其災大<sub>〇</sub>喪<sub>〇</sub>而社稷憂也

とあり、熒惑在心の占には、

熒惑守レ心、主死、天下大潰（春秋緯說題辭）

熒惑與レ心合、主死、不レ死出走、又曰易レ帝（春秋緯文耀鉤）

等とあり、此の條の話と類似してゐる。

（註四十四） 本論文（註卅六）参照

（註四十五） 墨子の思想を考慮に入れれば戰國中期からとしてもよいやうであるが、墨子の説には未だ所謂終始五徳の説がなく識緯の符命は之を以て説かれてゐるのであるから、呂氏春秋の例を以て初見とすべく、墨子は識緯の素材となつたと見るべきであらう。